熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象

有　元　光　彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs
in the Amakusa Dialect of the Kumamoto Prefecture

Mitsuhiko ARIMOTO

(Received September 30, 2005)

0．はじめに[1]

本稿の目的は、熊本県天草方言（本渡市・有明町・五和町・上天草市・倉岳町）を対象とし、動詞テ形のデータを挙げるとともに、そこに起こる特有な形態音韻現象を記述することにある。

この形態音韻現象とは、有元光彦（2005）等で言うところの「テ形現象」である。有元光彦（2005）によると、テ形現象は次のように定義されている。

(1)　テ形現象：
共通語の「テ」に相当する部分に、動詞の種類によって、促音や撥音が現れたり現れなかったりする形態音韻現象を指す。

例えば、ある方言Aにおいて、＜書いてきた＞を [kakkita] というように、共通語の「テ」に相当する部分に促音が現れるとする。一方、＜取ってきた＞は* [tokkita] とは言えず、[tottekita] という [te] が現れる形しか存在しないとする。このような場合、方言Aはテ形現象を持つと言う。テ形現象は形態音韻現象の総称であるので、促音や撥音しか現れなかったり（「全体性テ形現象」と呼ぶ）、逆に促音や撥音が全く現れなかったり（「非テ形現象」と呼ぶ）する場合も含めてテ形現象と呼ぶ。

本稿では、熊本県天草方言（本渡市・有明町・五和町・上天草市・倉岳町）にも、周辺地域と同様にテ形現象が存在するかどうか、存在するとしたらどのようなパターンを示すか、さらにこのパターンが周辺地域のテ形現象のパターンとどのような関連性があるか、どのような位置付けを持つか、について考察する。

1．方法論について

本稿では、初期の生成音韻論（Generative Phonology）の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形（underlying form）に音韻ルール（phonological rule）が線的（linear）に適

1　本稿の一部は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」（研究代表者：有元光彦・No.16520281）による。フィールドワークにおいては、熊本県本渡市・五和町・上天草市・倉岳町の各教育委員会に大変お世話になった。記して感謝する。

用されることによって、音声形（phonetic form）が派生される。[2] 基底形は、心内辞書（mental lexicon）に登録されている辞書項目が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の１つであるテ形の語構成（基底形）は、「動詞語幹＋テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a．子音語幹動詞：
/kaw/ ＜買う＞, /tob/ ＜飛ぶ＞, /jom/ ＜読む＞, /kas/ ＜貸す＞, /kak/ ＜書く＞, /kog/ ＜漕ぐ＞, /tor/ ＜取る＞, /kat/ ＜勝つ＞, /sin/ ＜死ぬ＞など
b．母音語幹動詞：
/mi/ ＜見る＞, /oki/ ＜起きる＞, /de/ ＜出る＞, /uke/ ＜受ける＞など
c．不規則語幹動詞：
/i/ ～ /itate/ ＜行く＞, /ki/ ＜来る＞, /s/ ＜する＞

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて /te/ である。テ形接辞の直後には、様々な単語が続く。例えば、[kita] ＜（～て）きた＞, [ke:] ＜（～て）こい＞, [miro] ＜（～て）みろ＞, [misai] ＜（～て）みなさい＞, [kure] ＜（～て）くれ＞, [kureŋka] ＜（～て）くれないか＞等である。

2．データ属性

本稿で挙げるデータは、平成17（2005）年９月にフィールドワークによって収集したものである。収集した地域は、本渡市（本町）・天草郡有明町（島子）・天草郡五和町（井手・二江・御領）・上天草市（松島町阿村・大矢野町維和）・天草郡倉岳町（棚底・浦）である。

データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号？は少し奇妙な言い方であると回答したものであることを、記号＆は当該の話者が聞いたことがあるがほとんど使わないと回答したものであることを、それぞれ表す。

また、本稿では語幹末分節音がαである動詞を「α語幹動詞」と呼ぶ。母音語幹動詞においては、語幹の音節数が１音節であるｉ語幹動詞を「i1語幹動詞」、２音節以上であるｉ語幹動詞を「i2語幹動詞」、１音節であるｅ語幹動詞を「e1語幹動詞」、２音節以上であるｅ語幹動詞を「e2語幹動詞」とそれぞれ呼ぶ。

3．分　　析

本節では、各方言についてデータを挙げつつ、テ形現象のパターンを考察していく。

本節で挙げるデータ表では、データ（音声形）を音声記号で表記する。表では、煩雑さを避けるため、各音声形の意味は載せない。初出の語幹がある場合には、その都度注で説明する。

2　以下、基底形は記号 / / で、音声形は記号 [ ] でそれぞれ括る。ただし、いずれか明らかな場合は省略することがある。

3．1．本渡市方言

本節では、本渡市（本町）方言のテ形現象を観察する。テ形のデータを【表1】に挙げる。

【表1】

語　幹	本　町		
kaw ＜買う＞	ko:tekita	ko:kkita	ko:ʧikita
tob ＜飛ぶ＞	to:dekita	to:kkita	*to:ʧikita
jom ＜読む＞	jo:dekita	jo:kkita	*jo:ʧikita &jo:ʤikita
kas ＜貸す＞	kja:tekita	kja:kkita	*kja:ʧikita
kak ＜書く＞	kja:tekita	kja:kkita	&kja:ʧikita
kog ＜漕ぐ＞	*koidekita ke:dekita	*ke:kkita isekke:[3] ʧi:kkure:[4]	*ke:ʧikita *ke:ʤikita
tor ＜取る＞	tottekita	*tokkita	*totʧikita
kat ＜勝つ＞	kattekita	*kakkita	*katʧikita
sin ＜死ぬ＞	ʃindemiro	*ʃimmiro	*ʃinʤimiro
mi ＜見る＞	mitekita	*mikkita	miʧikita
oki ＜起きる＞	okitekita	okikkita	&okiʧikita
de ＜出る＞	detekita	de:kkita	deʧikita
uke ＜受ける＞	uketekita	ukekkita	ukeʧikita
i ～ itate ＜行く＞	itatekita	itakkita	itaʧikita
ki ＜来る＞	kitemiro	*kiʔmiro	kiʧimiro
s ＜する＞	ʃiteke:	*ʃikke: *sekke:	ʃiʧike:

【表1】から分かるように、テ形には3種類の形が現れている。左端の形は、共通語の「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形である（この形を以後「te/de 型」と呼ぶ）。中央の形は、「テ」に相当する部分に促音が現れる形である（この形を以後「Q/N 型」と呼ぶ）。[5]右端の形は、「テ」に相当する部分に [ʧi] や [ʤi] が現れる形である（この形を以後「ʧi/ʤi 型」と呼ぶ）。ただし、3種類の各型において、すべての動詞で適格な形が現れるわけではない。動詞の種類によって適格な場合と不適格な場合とがあるのである。

3　＜急いで来い＞の意味。
4　＜注いでくれ＞の意味。
5　分かりやすくするために、表の中で Q/N 型が不適格である箇所を網かけで示しておく。以下同様である。

本方言の場合、te/de 型ではすべての動詞が適格な形を持っている。大部分が共通語形であると考えられる。Q/N 型は基本的に方言形であるが、Q/N 型において不適格な形が現れる動詞（表では網かけ箇所）については、対応する te/de 型が方言形である。この共通語形・方言形の意識の違いは、本稿で扱う他方言についても同様である。

次に、Q/N 型においては、動詞の種類によって適格性が異なる。次のような分布が見られる。

(3) a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, i2, e1, e2/ のときである。
b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1/ のときである。

音声的には、(3a) では促音しか現れない（撥音は現れない）。また、[ko:kkita] ＜買ってきた＞等、長音が含まれる場合がある。この形は、今回の調査では五和町御領方言でも現れているが、これら以外の地域では [kokkita] と短母音を含む形となっている。

(3)の分布を考察するとき、子音語幹動詞と母音語幹動詞を分けて考える必要がある。後者にはいわゆる「r 語幹化」の問題が絡んでくる。テ形において (3b) のような分布が現れるということは、i1語幹動詞の語幹が r 語幹化している可能性がある。例えば、/mi/ ＜見る＞の語幹は r 語幹化して /mir/ となっているのである。ただし、r 語幹化現象は活用形によってかなり様相が異なるようである。例えば、本方言のタ形と否定形を【表２】に挙げる。

【表２】

	タ　形	否定形
mi ＜見る＞	mita *mitta	miN miraN
oki ＜起きる＞	okita *okitta	okiN okiraN
de ＜出る＞	deta *detta	deN deraN
uke ＜受ける＞	uketa *uketta	ukeN *ukeraN

【表２】によると、タ形ではすべての母音語幹動詞が r 語幹化しておらず、否定形では e2語幹動詞以外で r 語幹化している。つまり、活用形によって r 語幹化の分布は異なっていると言えよう。[6] 従って、テ形では i1語幹動詞のみ r 語幹化しているとすると、(3b) は (4b) のように書き換えることができる。

(4) a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, i2, e1, e2/ のときである。

6　次節以降、【表２】のような r 語幹化のデータは紙幅の都合で割愛する。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n/ のときである。

(4b) のように書き換えると、/r, t, n/ の部分は弁別素性（distinctive feature）によって [-syl, +cor, -cont] と表記することができる。[7] 従来の筆者の研究では、この弁別素性の集合を利用して、テ形現象の中心的なルールである「e 消去ルール」を次のように仮定した。

(5) e 消去ルール：語幹末分節音が X でないとき、活用接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

本方言の場合は、X = [-syl, +cor, -cont] となる。

以上のことを考え合わせると、本方言は有元光彦（2004, 2005）で言うところの「真性テ形現象方言のタイプB方言」ということになる。このタイプの方言は、従来の研究では、五島列島中通島鯛之浦方言にしか見られなかったものである。

ここで気になることは、g 語幹動詞である。/kog/ ＜漕ぐ＞の場合は* [ke:kkita] という Q/N 型が不適格になるのに対して、/iseg/ ＜急ぐ＞や /tig/ ＜注ぐ＞の場合はそれぞれ [isekke:], [ʧi:kkure:] のように Q/N 型が適格になっている。調査語彙数が足りないが、ここから推測するに、「音節数条件」のようなものが関係しているのかもしれない。音節数条件は次のように定義される（cf. 有元光彦（2000, 2004））。

(6) 音節数条件：1 音節語幹の場合は排除される。

この条件によって、1 音節語幹の g 語幹動詞は Q/N 型を持たないということになるが、この条件を設定すると、もちろん /tig/ ＜注ぐ＞はその例外となる。音節数条件を設定する意義は、通時的にテ形現象が崩壊しているということを示唆することである。有元光彦（2004）でも示したように、五島列島の黒瀬・船廻（ふなまわり）・青方・岩瀬浦・籠淵（こもりぶち）・若松・上ノ平方言においては s 語幹動詞に、天草（苓北町）の坂瀬川方言においては s, b 語幹動詞に、音節数条件が絡んでいる。坂瀬川と本渡市本町が地理的に近いことを考慮すると、通時的にテ形現象の崩壊、即ち非テ形現象化が進行していると予測できる。この予測は、後述する有明町島子方言や五和町井手・二江方言からもサポートされるものである。

最後に ʧi/ʤi 型であるが、これは母音語幹動詞にのみ見られるものである。子音語幹動詞では、[ko:ʧikita] ＜買ってきた＞のみが適格である。インフォーマントによると、この型は熊本市に近い地域で使われるとの意識があるが、この意識を考慮すると、ʧi/ʤi 型は地域共通語の形式として強文化圏（熊本市方言圏）から流入してきたのかもしれない。そうであるとすると、地域共通語である ʧi/ʤi 型は、子音語幹動詞よりも母音語幹動詞に流入しやすいように見える。しかし、なぜ母音語幹動詞に流入しやすいのかについては現時点では不明である。

3．2．有明町方言

本節では、有明町（島子）方言のテ形現象を観察する。【表３】にテ形のデータを挙げる。

7　本稿で扱う弁別素性は、[syl（labic）]（音節主音性），[cor（onal）]（舌頂性），[cont（inuant）]（継続音性），[nas（al）]（鼻音性），[voice]（有声音性），[back]（後舌性）である。

【表3】

語　幹	島　子	
kaw <買う>	ko:tekita	kokkita
tob <飛ぶ>	to:dekita	to(:)kkita
jom <読む>	jo:dekita	?jokkita *joŋkita
kas <貸す>	kja:tekita	kja:kkita
kak <書く>	kja:tekita	kja:kkita
kog <漕ぐ>	ke:dekita	*kekkita *keŋkita
tor <取る>	tottekita	*tokkita
kat <勝つ>	kattekita	*kakkita
sin <死ぬ>	ʃindemisai	*ʃimmisai
mi <見る>	mitekita	*mikkita
oki <起きる>	okitekita	okikkita
de <出る>	detekita	dekkita
uke <受ける>	uketekita	ukekkita
i ～ itate <行く>	itatekita	itakkita *ikkita
ki <来る>	kitemisai	*kiʔmisai
s <する>	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita

【表3】から分かるように、本方言には te/de 型と Q/N 型しか存在しない。Q/N 型は動詞の種類によって適格性に次のような分布がある。

(7) a.「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, s, k, i2, e1, e2/ のときである。
b.「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /m, g, r, t, n, i1/ のときである。

本方言の場合も、本渡市本町方言と同様、母音語幹動詞では r 語幹化が関係するとして、子音語幹動詞だけを見ていけばよい。従って、(7)は(8)のように書き換えることができる。

(8) a.「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, s, k, i2, e1, e2/ のときである。
b.「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /m, g, r, t, n/ のときである。

Q/N 型の分布のキーとなるのは（8b）であるので、語幹末分節音の集合 /m, g, r, t, n/ を弁別素性で表すと、{[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+voice, +back]} となる。従って、(5)の e 消去ルールの適用環境 X もこの弁別素性の集合となる。従来の筆者の研究において、本方言と同じタイプのものは見つかっていない。ただし、類似のタイプとしては「真性テ形現象方言のタイプ D 方言」がある。タイプ D 方言は、適用環境 X = {[-syl, +cor, -cont], [+nas]} という e 消去ルールを持つ方言タイプである。

注意したいことは、m, g 語幹動詞である。３．１．で述べたように、本渡市本町方言では g 語幹動詞から非テ形現象化が進んでいた。本方言では、g 語幹動詞だけでなく m 語幹動詞においても Q/N 型が不適格であるので、本渡市本町方言よりもさらに非テ形現象化が進行していることになる。本渡市本町と有明町島子はいずれも本渡市市街地に近い位置にあるため、天草の中で強文化圏となっている地域には、非テ形現象化が進んでいるのかもしれない。

３．３．五和町方言

本節では、五和町方言のテ形現象を観察する。【表４】にテ形のデータを挙げる。

【表４】

語　幹	井　手		二　江		御　領	
kaw ＜買う＞	ko:tekita	*kokkita	ko:tekita	*kokkita	ko:tekita	ko:kkita
tob ＜飛ぶ＞	tondekita to:dekita	*tokkita	tondekita to:dekita	*tokkita	to:dekita	to:kkita
jom ＜読む＞	jo:dekita	*jokkita *joŋkita	jo:dekita ju:dekita	*jokkita *joŋkita	*jo:dekita ju:dekita	jukkita
kas ＜貸す＞	kaʃitekita *kja:tekita	*kja:kkita *kakkita	kaʃitekita *kja:tekita *ke:tekita	*kja:kkita *kakkita	kasetekita ke:tekita	ke:kkita
kak ＜書く＞	ke:tekita	*kekkita *kakkita	kaitekita ke:tekita	*kja:kkita	ke:tekita	ke:kkita
kog ＜漕ぐ＞	koidekita *ke:dekita	*kekkita	koidekita ke:dekita	*kekkita	ke:dekita	ke:kkita
tor ＜取る＞	tottekita	*tokkita	tottekita	*tokkita	tottekita	*tokkita
kat ＜勝つ＞	kattekita	*kakkita	kattekita	*kakkita	kattekita	*kakkita
sin ＜死ぬ＞	ʃindemiro	*ʃimmiro	ʃindemiro	*ʃimmiro	ʃindemiro	*ʃimmiro
mi ＜見る＞	mitekita *mittekita	*mikkita	mitekita *mittekita	*mikkita	mitekita	*mikkita
oki ＜起きる＞	okitekita *okittekita	*okikkita	okitekita *okittekita	*okikkita	oketekita	okekkita
de ＜出る＞	detekita	*dekkita	detekita *dettekita	*dekkita	detekita	dekkita
uke ＜受ける＞	uketekita	ukekkita	uketekita *ukettekita	*ukekkita	uketekita	ukekkita
i ～ itate ＜行く＞	ittekita	itakkita *ikkita	itekita	*itakkita *ikkita		itakkita *ikkita
ki ＜来る＞	kitemiro	*kiʔmiro	kitemiro	*kiʔmiro	kitemisai	*kiʔmisai
s ＜する＞	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita

【表４】から分かるように、３地域とも ʧi/ʤi 型は存在しない。しかし、Q/N 型は適格性の分布が３地域とも異なっている。次のようにまとめられる。

(9) 井手方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /e２/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, r, t, n, i1, i2, e1/ のときである。

(10) 二江方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、存在しない。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, r, t, n, i1, i2, e1, e2/ のときである。

(11) 御領方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, i2, e1, e2/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1/ のときである。

まず、井手方言(9)においては、「テ」に相当する部分に促音が現れるのは e2語幹動詞のときのみであるので、従来の筆者の研究では「真性テ形現象方言のタイプG方言」ということになる。このタイプの e 消去ルールの適用環境は X = [-syl] となる。タイプG方言は、天草の牛深市加世浦・鹿児島県川内市・鹿児島県長島の下山門野（しもやまどの）に見られる。次に、二江方言(10)においては、すべての動詞で te/de 型しか存在しない。これは「非テ形現象方言」と呼んでいる方言タイプである。次に、御領方言(11)は、本渡市本町方言と同じである。従って、e 消去ルールの適用環境は、X = [-syl, +cor, -cont] となる。このタイプは「真性テ形現象方言のタイプB方言」である。

通時的な観点で考えると、井手方言（タイプG方言）はかなり非テ形現象化が進行していると言える。地理的には、非テ形現象方言である二江方言が近接している影響もあるが、その他にも苓北町坂瀬川方言では前述のようにテ形現象が部分的に崩壊しており、また同じく苓北町の都呂々（とろろ）方言や隣接する天草町の福連木（ふくれぎ）方言は非テ形現象方言であることから、天草下島の本渡市中心部以外はかなり非テ形現象化が進行している可能性がある。

３．４．上天草市方言

本節では、上天草市方言のテ形現象を観察する。【表５】にテ形のデータを挙げる。

【表５】

語　幹	松島町阿村		大矢野町維和		
kaw ＜買う＞	ko:tekita	kokkita	ko:tekita	kokkita	ko:ʧikita
tob ＜飛ぶ＞	*to:dekita	tokkita		tokkita	to:ʧikita

jom ＜読む＞	jondekita	jo:kkita	jondekita	jokkita *joŋkita	jo:ʧikita *jo:ʤikita
kas ＜貸す＞		kjakkita	kaʃitekita	kjakkita	kja:ʧikita
kak ＜書く＞		kjakkita	kaitekita	kjakkita	kja:ʧikita
kog ＜漕ぐ＞		kokkita *koŋkita		oekkita[8]	oe:ʧikita[9]
tor ＜取る＞	ottottekita[10]	*ottokkita	tottekita	*tokkita	*totʧikita
kat ＜勝つ＞	kattekita	*kakkita	kattekita	*kakkita	*katʧikita
sin ＜死ぬ＞	ʃindemiro	*ʃimmiro	ʃindemiro	*ʃimmiro	*ʃinʤimiro
mi ＜見る＞	mitekita *mittekita	*mikkita	mitekita *mittekita	*mikkita	*miʧikita
oki ＜起きる＞	okittekita	*okikkita	okittekita	*okikkita	*okiʧikita
de ＜出る＞	detekita *dettekita	dekkita	detekita	dekkita	deʧikita
uke ＜受ける＞	uketekita	ukekkita	uketekita	ukekkita	ukeʧikita
i ～ itate ＜行く＞		itakkita *ikkita	itekita ittekita	itakkita	*itʧikita
ki ＜来る＞	kitemisai	*kiʔmisai	kitemiro	*kiʔmiro	?kiʧimiro
s ＜する＞	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita	*ʃiʧikita

【表５】を見ると分かるように、阿村方言では te/de 型と Q/N 型、維和方言では te/de 型と Q/N 型と ʧi/ʤi 型が現れている。

まず、Q/N 型の適格性は動詞の種類によって異なり、次のような分布となっている。

(12) 阿村方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, e1, e2/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1, i2/ のときである。

(13) 維和方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, e1, e2/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1, i2/ のときである。

(12), (13)から分かるように、両方言とも本渡市本町方言・五和町御領方言とほぼ同じ「真性テ形現象方言のタイプＢ方言」である。従って、e 消去ルールの適用環境は X ＝ [-syl, +cor,

8 ＜泳いできた＞の意味。
9 ＜泳いできた＞の意味。
10 ＜盗んできた＞の意味。

-cont] である。

次に、維和方言の ʧi/ʤi 型であるが、これは本渡市本町方言の ʧi/ʤi 型のような適格性の分布を示していない。維和方言では、次のようになる。

(14) 維和方言の ʧi/ʤi 型：

a．「テ」に相当する部分に [ʧi] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, e1, e2/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [ʧi] が現れない形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1, i2/ のときである。

(14)を見ると分かるように、「テ」に相当する部分に [ʧi] が現れるか現れないかの適格性の分布が、(13)の分布と同じなのである。従来の筆者の研究では、このような方言タイプを「擬似テ形現象方言」と呼んでいる。擬似テ形現象方言は、この他には長崎県南高来郡小浜(おぼま)町・千々石(ちぢわ)町、そして鹿児島県薩摩川内市上甑(かみこしき)町（旧薩摩郡上甑村）瀬上方言・長崎県南松浦郡新上五島町（旧新魚目町）津和崎方言という４地点しか見つかっていない。

さらに注目すべきことは、維和方言の中に、テ形現象と擬似テ形現象が“共生”しているという点である。他の上記４地点の擬似テ形現象方言では、擬似テ形現象のみ存在し、テ形現象は同時には存在していない。共生タイプは新発見である。

維和方言は、地理的には天草方言圏の東端にあると考えられる。西（天草方言圏）にあるテ形現象と東（熊本市方言圏）にある非テ形現象に挟まれ、擬似テ形現象が発生し、その擬似テ形現象とテ形現象が重なる部分に維和方言が位置していると考えられる。

３．５．倉岳町方言

本節では、倉岳町方言のテ形現象を観察する。【表６】にテ形のデータを挙げる。

【表６】

語　　幹	棚　　底		浦	
kaw ＜買う＞	ko:tekita	kokkita	ko:tekita	kokkita
tob ＜飛ぶ＞		tokkita	todekita	tokkita
jom ＜読む＞	jondekita	jokkita *joŋkita	jodekita	jokkita
kas ＜貸す＞	kja:tekita	kjakkita	kja:tekita	kjakkita
kak ＜書く＞		kjakkita	kjatekita	kjakkita
kog ＜漕ぐ＞		kekkita	koidekita	kekkita
tor ＜取る＞	tottekita	*tokkita	tottekita	*tokkita
kat ＜勝つ＞	kattekita	*kakkita	kattekita	*kakkita
sin ＜死ぬ＞	ʃindemiro	*ʃimmiro *ʃiʔmiro	ʃindemiŋka	*ʃimmiŋka
mi ＜見る＞	mitekita	*mikkita	mitekita	*mikkita

oki ＜起きる＞	okittekita	*okikkita	okitekita okittekita	okikkita
de ＜出る＞	detekita	dekkita		dekkita
uke ＜受ける＞		ukekkita		ukekkita
i ～ itate ＜行く＞		itakkita		itakkita
ki ＜来る＞	kitemiŋka	*kiʔmiŋka	kitemiro	*kiʔmiro
s ＜する＞	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita	ʃitekita	*ʃikkita *sekkita

【表６】を見ると分かるように、２方言とも te/de 型と Q/N 型しか存在しない。Q/N 型の適格性の分布は、次のようにまとめられる。

⒂ 棚底方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, e1, e2/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1, i2/ のときである。

⒃ 浦方言：

a．「テ」に相当する部分に促音が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /w, b, m, s, k, g, i2, e1, e2/ のときである。

b．「テ」に相当する部分に [te] や [de] が現れる形は、その動詞の語幹末分節音が /r, t, n, i1/ のときである。

⒂, ⒃から分かるように、２方言とも「真性テ形現象方言のタイプＢ方言」である。e 消去ルールの適用環境は X ＝ [-syl, +cor, -cont] である。

４．比　較

本節では、第３節で議論したことをまとめつつ、各方言のテ形現象を比較する。

４．１．方言タイプ

本節では、「テ」に相当する部分に現れる音声、テ形現象の方言タイプ、そして e 消去ルールの適用環境 X を比較する。

まず、「テ」に相当する部分の音声は【表７】のようにまとめられる。ここでは、方言形（te/de 型・Q/N 型）のみを示す。記号 Q, te, de は、それぞれ促音・[te]・[de] を表す。

【表７】

語幹末分節音	本渡市	有明町	五　和　町			上天草市		倉 岳 町	
	本町	島子	井手	二江	御領	阿村	維和	棚底	浦
w	Q	Q	te	te	Q	Q	Q	Q	Q
b	Q	Q	de	de	Q	Q	Q	Q	Q

m	Q	de/?Q	de	de	Q	Q	Q	Q	Q
s	Q	Q	te	te	Q	Q	Q	Q	Q
k	Q	Q	te	te	Q	Q	Q	Q	Q
g	Q	de	de	de	Q	Q	Q	Q	Q
r	te	te	te	te	te	te	te	te	te
t	te	te	te	te	te	te	te	te	te
n	de	de	de	de	de	de	de	de	de
i1	te	te	te	te	te	te	te	te	te
i2	Q	Q	te	te	Q	te	te	te	Q
e1	Q	Q	te	te	Q	Q	Q	Q	Q
e2	Q	Q	Q	te	Q	Q	Q	Q	Q
i～itate ＜行く＞	Q	Q	Q	te	Q	Q	Q	Q	Q
ki ＜来る＞	te	te	te	te	te	te	te	te	te
s ＜する＞	te	te	te	te	te	te	te	te	te

【表７】から分かるように、ほとんどの方言、即ち本渡市本町・五和町御領・上天草市阿村・維和・倉岳町棚底・浦方言は真性テ形現象方言（タイプＢ方言）である。本渡市本町方言のｇ語幹動詞には音節数条件が絡むようであるので、完全なタイプＢ方言とは言えないかもしれない。タイプＢ方言の亜種であろう。有明町島子方言は従来の研究では見られない方言タイプであるが、最も類似のタイプはタイプＤ方言である。従って、タイプＤ方言の亜種の可能性もあるが、島子方言と本渡市本町方言はｇ語幹動詞においてもある意味類似性があるので、両方言に共通する新たな方言タイプを設定した方がよいのかもしれない。今後の課題とする。五和町井手方言は真性テ形現象方言（タイプＧ方言）である。また、五和町二江方言は非テ形現象方言である。維和方言は、真性テ形現象だけでなく、擬似テ形現象も持っている。

次に、ｅ消去ルールの適用環境Ｘは、真性テ形現象方言だけが持っているが、方言タイプによって次のような違いがある。

(17) a．XB = [-syl, +cor, -cont]（タイプＢ方言：本町・御領・阿村・維和・棚底・浦方言）
b．X = {[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+voice, +back]}（島子方言）
c．XG = [-syl]（タイプＧ方言：井手方言）

擬似テ形現象も持つ維和方言では、テ形接辞 /te/ の /e/ を /i/ にする母音交替ルールも持っており、このルールの適用環境は（17a）と同じである。

４．２．地理的な分布

地理的な観点から見ると、今回扱った天草方言は３つの方言圏に分けられる。１つ目は、本渡市及び天草上島を中心とした地域であり、タイプＢ方言が広く分布している。これは、天草方言群の中で強文化圏となっているものであろう。２つ目は、天草下島の北部・西部を中心とした非テ形現象方言が見られる地域である。この中には、非テ形現象に近い（真性テ形現象が崩壊しつつあるという）方言タイプ、例えばタイプＥ，Ｇ方言等も含まれる。３つ目は、維和方言に見られる擬似テ形現象方言である。維和島よりも東に行くと、熊本市方言圏となるよう

である。ただし、真性テ形現象・擬似テ形現象と非テ形現象との境界がどこにあるのかは、現時点では不明であり、今後の調査に委ねるしかない。

4．3．通時的な問題

前節でも述べたが、天草方言には大きく３つの方言圏があり、通時的に問題となるのは、タイプＢ方言圏の両端、即ち非テ形現象方言と接触するところである。これらの接触地域では、多かれ少なかれ真性テ形現象の崩壊が起こっている。分かりやすくするために、「テ」の部分の音声及びｅ消去ルール等の適用環境Ｘを方言圏ごとに【表８】にまとめてみる。

【表８】

方言タイプ	非テ形現象方言	真性テ形現象方言	擬似テ形現象方言	非テ形現象方言
地域	天草下島北部･西部	本渡市･天草上島	維和方言	熊本市方言圏
「テ」の部分の音声	te/de 型	te/de 型 Q/N 型 ʧi/ʤi 型■	ʧi/ʤi 型● Q/N 型	ʧi/ʤi 型▲ te/de 型
ｅ消去ルール等の適用環境	-----	XB	XB	-----

まず、タイプＢ方言圏の東端においては、３．４．で述べたように、真性テ形現象（タイプＢ方言）と非テ形現象の間に擬似テ形現象（維和方言）が現れている。擬似テ形現象の位置付けはまだ明確になっていないが、もし真性テ形現象が崩壊しつつある途中段階、即ち非テ形現象化の途中段階であるとすると、真性テ形現象と非テ形現象の接触地点に生ずるのはもっともなことである。しかも、「テ」の部分の音声においては、「ʧi/ʤi 型●」は非テ形現象方言（熊本市方言圏）の「ʧi/ʤi 型▲」から来たものと考えられる。しかし、この「ʧi/ʤi 型▲」は、維和方言のすべての種類の動詞に入り込むことはできなかったようである。おそらく、そこにはｅ消去ルールの適用環境 XB のブロックがあったのではなかろうか。

XB という集合は、単に１つのルールの適用環境というだけでなく、テ形という場における９種の語幹末子音の分割の問題であるように考えられる。この問題は、有元光彦（2003, 2004）では“棲み分け”の問題として捉えている。有元光彦（2004）では、テ形現象（真性テ形現象）と音便現象（非テ形現象）が、テ形・タ形という場をどのように“棲み分け”ているかという問題を議論した。ここでの問題は、テ形というよりローカルな場を対象としている。テ形という場において、真性テ形現象が９種の語幹末分節音の集合をどのように分割、即ち“棲み分け”を行っているかということは、Ｘが決定しているものである。Ｘは複数の弁別素性が積や和という集合演算によって組み合わされたものである。従って、最小レベルでは、Ｘを構成する各弁別素性が、どのような集合演算の関係で“棲み分け”を行っているのかということが問題となるのではなかろうか。しかし、現時点では、“棲み分け”の理論化については不明な点が多い。今後の課題である。

一方、タイプＢ方言圏の西端においては、本渡市本町方言に見られる「ʧi/ʤi 型■」は、維和方言の「ʧi/ʤi 型●」と随分様相が異なる。近接地域に ʧi/ʤi 型が存在しないということは、

おそらく熊本市方言圏の「ʃi/ʤi 型▲」から飛び火的に来たものと考えられる。インフォーマントに熊本市方言的であるという意識があることも、その証拠となろう。ただし、なぜ飛び火したのか、なぜその際母音語幹動詞から最初に入り込んだのか、といった問題については現時点では不明である。

5．おわりに

本稿では、熊本県天草９地域の方言の動詞テ形を取り上げ、そこに起こる独特な形態音韻現象、即ちテ形現象を分析した。ここでは、従来の筆者の研究では見られなかった新しい方言タイプ、即ち真性テ形現象方言のタイプＤ方言の亜種、及び真性テ形現象と擬似テ形現象が共生する方言タイプを発見した。この新発見によって、天草方言のおおよその全体像が明確になっただけでなく、通時的な言語変化の問題にも示唆を与えることができた。

今後の課題は、さらに調査分析を進めることによって、真性テ形現象方言の確定、真性テ形現象の崩壊（非テ形現象化）の問題、及び“棲み分け”の問題を厳密に記述し、理論化していくことである。

【参照参考文献】

有元光彦（2000）『「海の道」システム－九州西部島嶼部方言における動詞テ形現象－』平成10-11年度文部省科学研究費補助金・奨励研究（A）「九州島嶼部方言における「海の道」の実証とその方言差の理論的研究」（課題番号：10710262）研究成果報告書

――――（2001a）「「海の道」方言圏の可能性－九州西部地域方言の動詞テ形について－」『筑紫語学論叢』迫野虔徳編　風間書房　左 pp.23-35

――――（2001b）「九州方言における動詞テ形の音韻規則」『音声研究』日本音声学会編 pp.19-26

――――（2002）「２つの連続性と２本の「海の道」－九州西部諸方言の動詞テ形に起こる音韻現象－」『国語学』国語学会編　pp. 1 -16

――――（2003）「九州西部･琉球方言の動詞テ形･タ形に起こる音韻現象についての試論」『研究論叢（山口大学教育学部）』 第53巻　第１部　pp.67-80

――――（2004）『九州西部方言における動詞「テ形現象」の記述的研究』広島大学大学院社会科学研究科博士論文

――――（2005）「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道－海の道－」『日本語学』2005年９月号　明治書院　pp.74-82

Chomsky,N. & M.Halle（1968）*The Sound Pattern of English*, Harper & Row.

Kenstowicz, M.（1994）*Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.

鶴田功（2000）『心に響くふるさとことば・天草方言集・俚諺ことわざ集』（第４版）　私家版